



## 山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化（6）： 指導資料作成の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 守 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000155">https://doi.org/10.32150/0002000155</a>

# 山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化(6)

## ―指導資料作成の試み―

はじめに

「北海道の人は生まれた時から、朝から晩までアイヌ語の地名の中で暮らして、地名というものに興味を持っていない。だからそれを捨てるのが少しも惜しくなくてどんどん変えていく。私たちが口をすっぱくしてだめだと言っても、緑町がいいとか、柏木町がいいとかいうことでどんどん変っていく。それくらい北海道の人たちは一般は関心が少い。」(注1)山田秀三は対談の中でこう述べていますが、これをお読みの道民の方々はどう感じますか。国語の先生方ならば、言葉に興味がおありでしょうか。地名への関心も高いでしょうか、高校生になると山田の発言がまさに的中し、「えっ、地名に興味あんの?」という声がよく聞かれます。彼らの多くは、表音記号のように地名を使用しているようですが、地名、殊にアイヌ語由来の地名には意味がありません。

さて、「国語教育にアイヌ文化を」というテーマで、山田秀三の文章の教材化に取り組んでもう六年になります。一年目は教材とその概要(注2)を提案し、その後は高校教科書でお馴染みの評論文(注3)である「こととすること」の四社の指導資料に倣って、左の表のような指導資料を作りました(注3・4・5・6)。

教材「アイヌ語地名を歩く」(甲乙丙丁戊)	資料No.
甲 『北海道の地名』序文	(1)
乙丙丁戊 『アイヌ語地名を歩く』	←

谷口守

指導資料	
1 単元のねらい	(2)
2 教材のねらい	← (2)
3 学習指導・授業の展開例(時間)	(3)
4 出典・原文との異同	← (3)
5 筆者解説・略歴	← (3)
6 要約(百字・二百字)	← (3)
7 構成(段落構成)	← (3)
8 構成展開図	← (3)
9 発問例と解答例	← (4)
10 語句の説明	← (4)
11 作品解説	← (6)
12 参考資料	← (6)
13 参考文献	← (6)
14 学習の手引き解説	← (6)
15 板書例	← (6)

以下は、(5)の続きの指導資料(以下「指導書」)です。なお、「本文」とは指導資料そのものを指します。「解説」とは、なぜそのように作ったかの説明です。そこには「ことであることとすること」(以下「であること」)の「第一学習社」(以下「第一」)、「大修館書店」(以下「大修」)、「桐原書店」(以下「桐原」)、「教研出版」(以下「教研」)の指導書比較

が書かれており、その長所を本指導書に活かしたいと考えます。

## 11 作品解説(本文)

教材「アイヌ語地名を歩く」の魅力は、第一に「抽象的な文章(甲「北海道の地名」と具体的な文章(乙「札幌のオソウシ」丙「地名に嘘はない」という複数の構成)である。抽象的な文章である「甲」を読み、学習者は聞き慣れない人名や語句に戸惑い、難解に感じるであろう。ところがその後で具体的な文章である「乙丙」を読み、筆者と共に地名解という宝探しの旅に同行するように楽しく読めるに違いない。そこでの方法に対応する抽象的箇所を、先に読んで「甲」から探し、見つけ出してもらいたい。学習方法としては、前者を先に、その次に後者を読んで一般的な記述を前者から見つける読み方が学習に効果的だろう。また、「乙丙」を先に読んだ後、山田の地名調査法一般を類推し、その後で「甲」を読む方法もある。

第二に「甲」の文章の「主張と論拠の関係」である。筆者の主張は、「甲」の文章、最終⑥段落の「古くからの地名を大切にしていって戴きたい」に収斂される。なぜならそれは、⑥段落「アイヌ語地名」の「地方色こそがその土地土地の誇り」であり、「アイヌ時代から開拓時代を通じてきた歴史的地名」だからである。ただし、それは⑥段落だけの読解だけではわからぬことである。学習者は①～⑤段落の読解を通じて、聞き慣れない人名や語句に多く触れ、難しく感じるかもしれないが、最後に至つてこの主張のために書かれていた文章だったのかと気づくはずである。さらに、それでも難解な者には、「乙丙」の文章を読んで、地名語義から地形が推定できると理解したならば、筆者の、アイヌ語地名を大切にという主張にも納得できるはずである。

第三に「多文化共生社会」を実感することができるところにある。我が国が「単一民族国家」でないように、「単一文化国家」でもないことは自明のことであろう。ただ、それをどれくらいの高校生(国民)が実

生活で感じているかは疑問である。本文を読んで、学習者の中には、普段あまり意識しないで使用しているであろう地名に意味があるという「発見」に驚きを覚える者がいるかもしれない。この「発見」を通じて、北海道や北東北のアイヌ語由来地名はもちろん、自分たちの住所地名にも、ひいては地名全般にも何かしらの意味があると敷衍して考えることができるようになるだろう。なぜ地名なのか。アイヌ文化は言語・文学・芸能・祭祀・衣食住に関する事物など様々な伝えられている。その中で、それがアイヌ語由来だと意識するしなはともかく、「札幌」「セコ」など、多数の国内外の人々が知っている、アイヌ語が反映された最たるものは、「アイヌ語由来の地名」であろう。なぜなら、現代人がアイヌ文化の代表であるアイヌ語を使用する機会が一番多いのが「アイヌ語由来の地名」だからである。そして地名というのは、高校生はもちろん、小中学生でも聞き、知り、使うはずであり、アイヌ文化に分け入るよき出発点として、いわば「アイヌ文化入門」として最適だと考える。すると、「多文化」「アイヌ文化」とあらためて持ち出す以前に、幼少から「アイヌ文化」に触れて生活していたのだと実感するはずである。

以上三つのことから、高等学校国語科として教材「アイヌ語地名を歩く」がとても魅力であることがおわかりいただけたかと思う。もし一人でも多くの高校生が本文章に触れるならば、「古くからの地名を大切にしていって戴きたい」という筆者の思いが伝わり、山田も本望であろう。そして、そこには有名無名の蝦夷地探検家や地名研究者らの思いも含まれることを読み取りたい。しかし、本教材を単なる地名の話、また、独自の方法で地名語義を見出しただけの文章とするのは早計である。筆者山田が常に念頭に置いていたのは、松藩や明治政府からよい扱いをされたとは決して言えない先住民族アイヌの思いであり、彼に地名の意味を教える「アイヌ語の意味が残る」と涙を流したエカシやフチ(お爺さんやお婆さん)、差別に負けずに

民族の言葉を必死に守ろうとした友人知里真志保らの「情念」にも似た思いであった。それこそが、山田が現代人に伝えたい痛切なメッセージであるように思えてならない。

## 11 作品解説（解説）

以下の表は「である」の「指導書」にある、教材の「解説」についてである。

出版社	名称	一行 字数	行数	中身の概要
第一	作品鑑賞	31	47	筆者からのメッセージ分析、読解注意点
大修	解説	29	123	教材としての魅力、学習指導の方向性
桐原	テーマ解説	24	158	教材としての魅力 力 教材化での省略問題、文体の問題
数研	読解のカギ	32	183	本文読解の補足・おさらい、文章が難解である理由

多くの授業時に複数の「指導書」を比較する機会は少ないが、「解

説」一つを見ても、その分量はもろん、書かれている内容が随分違うことに気づかされた。「第一」は本文では直接語られていない発展内容を鋭く分析しており、「数研」は本文に書かれていることを繰り返し、やや冗長に感じられた。これらのうち右表太字の「筆者からのメッセージ分析」教材としての魅力」を参考にさせていただいた。

## 12 参考資料（本文）

〈出典からの省略部分（左表①）〉〈筆者関連文章（左表②③）〉〈筆者以外の関連文章（左表④⑤）〉を掲載しようとしたが、長くなりすぎため文章そのものは割愛し、その概要を記す

- ① 山田秀三『北海道の地名』序文（本文から削除された部分）
  - 甲⑤段落「飽きもしないで道内を歩き回ったのはそんな意味だった。」の後。
  - 甲⑤段落「大切に行つて戴きたいものである。」の後。
- ② 山田秀三『アイヌ語地名を歩く』「まえがき」
- ③ 山田秀三『アイヌ語地名を歩く』「あとがき」  
私の調査手順概説
- ④ 金田一京助『東北と北海道のアイヌ語地名考』「序」
- ⑤ 知里真志保『東北と北海道のアイヌ語地名考』「序」

①は、本文「甲」前後の削除された部分である。「甲」は単行本『北海道の地名』の序文であるため、執筆の動機や経緯、地名記載順序や規則、謝辞などが綴られている。

②は、本文「乙丙丁戊」の出典『アイヌ語地名を歩く』の「まえがき」である。ここには本文執筆の動機、執筆内容、謝辞などが綴られている。

③は、同じく『アイヌ語地名を歩く』の「あとがき」である。そこには「私の調査手順概説」として、旧記旧図調査、現在の地図調査、現地

調査、同形類形地名類推、古老聞き取りや付近地形調査、写真整理、メモ帳・ファイル作り、そして日記旧図の再調査などの手順の実際が書かれている。本文「甲」⑤段をより具体化した文章と言つてもよいだろう。

④は、筆者の師匠である金田一が、筆者初の単行本序文に寄せた文章である。師は弟子を「超人的有為果敢な行動力と熱意とで遂げられたこの臨地踏破の実績」と評している。

⑤は、④の次に書かれた文章で、知里は筆者を「アイヌ語の地名研究において、山田さんは私の弟子であり、師匠である」「山田さんの方法の強みは、私どものように頭で書くのではなくて、足で書く所であり、その「研究にはよい意味での実証精神が横溢している。けれどもはつたりもない素直な文章と、現地の写真やスケッチや地図によつて読者は本書において、それをいやというほど実感させられる」と評している。

④の「臨地踏破」と、⑤の「足で書く」とあるように、筆者の現場主義の調査姿勢を読み取ることができよう。④と⑤は、筆者が学恩を受けた二人のアイヌ語研究家が、筆者をどう評しているかの文章であり、両者が「臨地」「現地」と共通した評価をしていることが興味深い。

## 12 参考資料(解説)

大修	第一	出版社	名称	資料数	分量	内容	備考
補助資料集	参考資料 2			2頁半 4頁半		1 本文割愛部分 2 本文あとがき	
		入手できず				調査不可	

		桐原	(別冊) 不明	不明	
	数研	参考資料 4	参考資料 9	2頁 1/3頁 2/3頁 1/3頁 1/3頁 2/3頁 2/3頁 別冊に合計 4頁	1 筆者の座談会 2 筆者の文章 3 筆者の文章 4 中村保男の文章 5 加藤周一の文章 6 筆者の文章 7 夏目漱石の文章 8 内山節の文章 9 宮村治雄の文章

「参考資料」に関して、「大修」を除く三社の掲載内容は、「本文割愛部分」と「筆者の文章」「筆者以外の関連文章」に大別できる。

時間数の都合上、学習者に参考資料を読ませることはなかなかできないが、機会があれば複数の文章を読み比べさせたい。よつて、できるだけ多くを掲載したいものである。「桐原」は指導書内に5頁ほどの掲載の他、別冊の「資料集」も用意する周到ぶりである。これらは、徒に多いのはまずいが、本文と関連のある事柄であれば、どれだけ多くても長くても現場で活用する者としては重宝するのではなからうか。あととは作成会社の紙面の都合と考える。

本稿では「桐原」を見做い、「本文割愛部分」と「筆者の文章」「筆者以外の関連文章」を掲載した。

〔筆者著作〕山田秀三◎は教材本文所収)

◎『北海道の地名(昭和59(1984)年・北海道新聞社)

この序文を教材「甲」として使用した。北海道の主な地名の語義を、古文獻を引用しつつ川筋毎に紹介している。

◎『アイヌ語地名を歩く』(昭和61(1986)年・北海道新聞社)

この著作中の4作を教材「乙丙丁戊」として使用した。筆者が自身の研究40年を回想した随筆集(稿者注・唯一の随筆集と思われる)。

◎『アイヌ語地名の研究 第一〜四巻』(昭和57〜58(1982〜83)年・草風館)

筆者のアイヌ語地名に対する考え方がまとめられた著作集。

◎『東北・アイヌ語地名の研究』(平成5(1993)年・草風館)

◎『アイヌ語地名の輪郭』(平成7(1995)年・草風館)

〔筆者共著〕

◎常呂町百年史編集委員会編『常呂町百年史』(平成元(1989)年・常呂町)

〔筆者監修〕

◎『アイヌ語地名資料集成』(昭和63(1988)年・草風館)

〔筆者以外筆者言及〕

◎北海道環境生活部『アイヌ語地名リスト』(平成13(2001)年)

◎北海道立アイヌ民族文化研究センター編集『アイヌ語地名を歩く―山田秀三の地名研究から―』(平成16(2004)年)

◎北海道立アイヌ民族文化研究センター『ボン カンピンジ

9 アイヌ文化紹介小冊子 地名』(平成16(2004)年)

◎北海道博物館編集『アイヌ語地名と北海道』(令和元(2019)年・北海道博物館)

◎北海道博物館編集『アイヌ語地名と北海道 連続講座・特別フォーラム 講演記録』(令和3(2021)年・北海道博物館)

〔その他〕

・アイヌ語・地名に関するもの

◎知里真志保『アイヌ語入門』(昭和31(1956)年・北海道出版企画センター)

◎知里真志保『地名アイヌ語小辞典』(昭和31(1956)年・北海道出版企画センター)

◎札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫1 札幌地名考』(昭和52(1977)年・北海道新聞社)

◎関秀志『札幌の地名がわかる本』(平成30(2018)年・亜

璃西社)

・地質に関するもの

◎札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫4 豊平川』(昭和53(1978)年・北海道新聞社)

◎札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫7 地形と地質』(平成8(1996)年・北海道新聞社)

◎前田寿嗣『歩こう!札幌の地形と地質』(平成19(2007)年・北海道新聞社)

◎宮坂省吾・田中実・岡孝雄・岡村聡編著『札幌の自然を歩く』(第3版)』(平成23(2011)年・北海道大学出版会)

・郷土史に関するもの

◎札幌市豊平区『豊平区の歴史』(平成14(2002)年・札幌

市史に関するもの)

◎札幌市豊平区『豊平区の歴史』(平成14(2002)年・札幌

13 参考文献(解説)

数研	桐原	大修	第一	出版社
参考文献	参考図書	ブックガイド	参考文献	名称
2頁 33	半頁 22	1頁 9	8行 7	全文献数 使用頁数
18	2	2	1	筆者著作
15	11	6	1	筆者言及
0	9	1	5	その他

桐原	大修	第一	出版社
参考図書	ブックガイド	参考文献	名称
丸山真男の著作 丸山真男の思想に言及した著作	教材研究・授業研究のために8 読書指導・発展学習のために2	なし	文献の分類

数研	参考文献	その他
	教師用(提示33・紹介6) 生徒用(紹介2)	その他

まず、右表のうち「筆者言及」とは、筆者のことに触れた筆者以外の著作で、「その他」とは、特に筆者のことに触れていないが、本文に関係があると各社が考えて紹介した著作である。

「第一」は筆者著作が1作のみで、筆者言及1、漱石1、事典等4と他3社より少ない。教師や学習者に提示するためではなく、出版社が指導資料作成のために使用した文献と思われる、他社とは趣旨が異なる感がある。各文献の紹介文章はない。

「大修」は「教材研究」「発展学習」のためにと副題を付け、「教師、学習者それぞれに紹介したいガイド」という趣旨が伝わる。また、学習者のための文献の紹介文を十行前後で掲載している。

「桐原」は計22作の書名を列挙している。資料作成・使用文献とも、教師・学習者用ともとれる掲載の仕方である。書籍の紹介文章はない。「数研」は「教師用」「生徒用」に分け、教師用では、筆者著作を18作の名称を列挙してその中で1を、筆者言及を10作列挙してその中で5を、それぞれ参考文献として紹介している。いずれの文献にも紹介文数が付けられている。生徒用では提示した中から筆者著作1、筆者以外1を掲載している。

四社で一番説明が多いのは「数研」であり、「この本を是非勧めたい」という気が感じられる。

以上のことから、指導資料作成では、右表に倣って(筆者著作)〈筆者以外筆者言及〉(その他)に分け、必要に応じて紹介文を付けた。

#### 14 学習の手引き解説(本文)(解説)

学習の手引きと、その解説は、既に拙稿(注7)に提示しているのを省略する。なお、その手引きは「である」四社を参考にしたものではない。ただ、強いて言えば「数研」にやや近いだろうか。複数の文章を比較する一問を除いて、全体の流れを理解して論旨をつかむ問い、文章内の語句を説明する問い、文章で学習したことを生かして自身自身のことを調査検討する問い等、偶然だろうが類似点があった。「である」の四社指導書は、ともに問い、解答例、解説がその順で指導書末に載っていた。それらは拙稿を含め以下の表のとおりである。

	第一	大修	桐原	数研	拙稿
名称	学習	「学習のポイント」解説	学習の手引き	てびきの解説	学習の手引き
出題数 頁	5 2半	15 3	3 1	4 1半	4 頁は紙面の大きさに違いがあり省略
問いの詳細	内容に関する問い	内容の理解 4題 ことばと表現 3題 語句と漢字 8題	読解2 発展1	確認1 学習2 発展1	各段落の確認1 内容の理解1 複数文章比較1 調べ学習1

#### 15 板書例(本文)(解説)

板書例は本指導書「8 構成展開図(本文)」がそれに相当し、既に拙稿(注8)に提示しているのを省略する。なお、その板書例は「である」四社を参考にしたものではない。段落や文章ごとに一つの板書例を目指した。記載のない「第一」を除き、三社の板書例は共に「語句の説明」と併置している。「桐原」「数研」「二社は、段落ごとに仕切りがあり、何段落の板書例かがすぐわかる。「大修」はその仕切りがないため前後のページを見ないと何段落の板書例なのかかわかりにくい。それらは拙稿を含め以下の表のとおりである。

	第一	大修	桐原	数研	拙稿
名称	なし	板書例	板書例	板書例	板書例
板書例数	0	7	12	10	甲 6 乙 1 丙 1 丁 1 戊 1
備考		何段落の板書かわかりにくい	何段落の板書かわかる 段落ごとに1〜2の板書例	全10段落 各段落に例1でわかりやすい	甲は全6段落で各段落1ずつ 他は各文章で1

教材「アイヌ語地名を歩く」指導資料は以上である。

## 考察

北海道生活環境部は、北海道によるアイヌ政策の中心的役割を果たしており、「アイヌ語地名は、アイヌの人たちの伝統的な生活や本道の自然環境を理解する上で貴重な文化財産である」と謳っている。(注9)(傍線稿者)

また、教育界では北海道教育庁生涯学習部学校教育課が「アイヌ語の地名は、アイヌの過去の生活環境を伝える重要な資料である。また、私たちが、もっとも身近かにふれることができるアイヌ文化の一つでもある。」と述べている。(注10)(傍線稿者)

「ここ数年「国語教育にアイヌ文化を」と題して取り組んできたが、ある研究会で「地名は文化か?」と問われた。稿者は既に文化だと信じ込んでいたので、答々に窮してしまった。確かに地名が文化か否かは簡単に決められるものではない。アイヌ語以外の日本語等の「地名」一般書を見ると、多くその冒頭に「地名は文化だ」と書かれている。それではアイヌ語由来地名は、北海道生活環境部や北海道教育庁生涯学習部学校教育課が述べているように、「文化」と言えるのだろうか。以下で考察していきたい。

一般的に「地名」はどのように発生するのか。より古いものから柳田國男の論考を見たい。民俗学者で有名な柳田國男は、明治期から地名に関する著述も多い。柳田のアイヌ語由来地名に対する考えには、現代の研究者から支持を得ていない(注11)ものがあるが、地名一般で考える際、中には教えられることがあると考える。柳田の語から住民が必要で名づける「地名」発生的一般を見たい。(傍線稿者)

定住産業に従事せぬ人民は土地を區劃する必要があるの  
で土地の命名は等しく生活の必要に基くとしても、狩獵や採  
取又は其爲の旅の目的のみに土地を使用して居る者に  
は、地名を附ける必要は單に目標用である。甲の地と乙

の地とを區別して置けばそれで宜しいのである。之に反して一段進んで定期の占有を必要とする職業、例えば林業農業等に従事する者に至つて、初めて細かな地名を附けて、忘れないで置くと云ふ必要が生ずる(注12)

ここで柳田は、「土地利用の状態如何」によつて、その地名が「目標用」を必要とするか、「細かな地名」を必要とするかで異なる述べている。このことは和人のみならずアイヌ民族にも該当しないだろうか。特に、おおむね明治期以前のアイヌ民族の生活使用の地名では、「狩獵や採取又は其爲の旅の目的」すなわち「目標用」が多かつたのではないだろうか。

また、柳田は地名発生的一般を「普通・固有名詞」という語を使つて以下のようにも述べる。(傍線稿者)

即ち最初普通名詞として無邪氣に用ゐて居たのが、何時となぐ文法書に所謂固有名詞として變つて行きつゝあるのである。吾々が始めて土地に名を附けた時には名詞の普通固有の區別などは無かつた。例へば海岸に近く島が一つあるとそれを島と呼ぶが、二つ並んで居ると區別しなればならぬので、大島小島とか東島西島とか區別する。(注13)

これと似たことがアイヌ語由来地名にも書かれている。山田秀三の「大黒島」に関する論考を見たい。(注14)

室蘭港の入口にある島名。この島はたまたモシリ(島)と呼ばれていた。また絵鞆岬の外側にある、小さい恵比寿島(戎島)をポン・モシリ(小・島)と呼び、大黒島の方を対照的にポロ・モシリ(稿者注・大島)ともいった。

一例にすぎぬが、アイヌ民族でも和人でも共通して、地名発生時点において、土地の名称を普通名詞なのか固有名詞なのか、その區別なく使用し、そして、必要に応じてその名称に語を付け加えて呼

んだという。このようにアイヌ語由来地名も日本語地名も、各発生時において共通性があるようだ。すると、日本語地名の一般書と同じように、アイヌ語地名も「文化」と呼べないだろうか。

ただ、そこで注目すべきは、アイヌ語学者の児島恭子が「現在アイヌ語地名と呼ばれている地名の中には、アイヌの人々が代々その名で（アイヌ語で）呼んできたのではないものがたくさん含まれている」（注15）と述べていることである。アイヌの人々が呼んでいないなら誰が呼んだのか。

江戸時代後期から明治にかけて、ロシアの南下政策に備え、幕府や明治政府にとって蝦夷地・北海道の統治は急務であった。近代国家ロシアに対抗するためには、日本も近代化する必要があった。よって幕末・明治初期の和人探検家たちは、先住民アイヌに現地を案内させて蝦夷地・北海道や樺太、千島を測量し地図を作成した。地図には当然地名が必要になり、和人がアイヌに聞き記す形で進められた。児島は「調査者が土地のアイヌに尋ねて返ってきた答えには、地形を説明する言葉にすぎず、「地名」として存在していた名称とはいえないものもあった」（注16）、地形を説明する言葉は「動的」であり、「言葉として生きており、アイヌの地名として創造力をもっていた」、「しかし記録されることによつて「固定化」し、「その時点で言葉の形としてのアイヌ語地名が成立し、アイヌの地名とはかぎらなくなつた。」（注17）と述べている。つまり、案内アイヌの回答の中には、彼ら使用の「地名」ではない、地形の説明にすぎないその場作成の情報も含まれ、それが地図に掲載されることで「固定化した」「アイヌ語地名」になつていった、というのである。「固定化」させたのは紛れもなく地図を作成した和人であり、その後それらの土地の名を「地名」として主に呼び、使ってきたのも和人である。

このようにアイヌ語由来地名には、和人地図制作者の要求によつて作り出され、それが後に地図に掲載されたものもあった。地図作

成者はそれらの名称を含むものを地図に書き入れ完成させ、提出する。それを松前藩、開拓使や北海道庁が採用し、「地名」となつていき、変遷を経て現代に至っている。この地名の「変遷」について本稿では述べないが、地名発生に主眼を置いて見ると、①住民の生活上の必要性から生み出され使用された土地の名、②和人の地図作成上の必要性から作られた土地の名の大きく二つが挙げられる。①は日本語の地名も共通点がある。しかし、②においてはアイヌ語由来地名特有の、いわば案内人アイヌと地図作成和人の「合作」ともいうべき性質があり、そこに日本語地名とは違つた複雑な発生過程が浮かび上がつてきて、何が「文化」か一筋縄では言えなくなつてしまう。この②アイヌ語由来地名の中でもアイヌ民族が日常生活で使用していない地形の説明は、はたして「アイヌ文化」と言えるのだろうか。そう問われれば、②は純粹にアイヌ文化だと言えない側面がある。ただし、だからと言ってアイヌ語由来地名の中でどれが①で、どれが②かという分類は、はたしてできるのであろうか。

そこで、あらためて「文化」とは何か、基本から考え直してみた。手元の辞書（注18）に「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによつてつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出していくもの。」とある。地名は「芸術・道徳」とは遠いだろうが、地名によつて人々の生活や歴史がわかれば「学問」に通ずるだろうし、例えば「カムイのつく地名ならば「宗教」にも通ずるだろう。そして何よりアイヌ特有の「精神の働きによつてつくり出され、「新しい価値を生み出したものであるならば、「文化」と言つて納得してもらえらるだろう。

話を戻そう。確かに、①で②かの判別は困難であるが、アイヌ民族が日常生活で使用していない②を含むアイヌ語由来地名は、本当に価値のないものだろうか。それらの中で全てでなくとも、もし先住民の生活や歴史を垣間見ることができ、それらの中にアイ

又民族特有の考え方を反映したものを含み、アイヌ文化の代表であるアイヌ語に関係するのであれば、複雑な成立過程を踏まえた上で、それらを価値のある「アイヌ文化」と呼んでもよいのではないだろうか。まず、「先住民の生活や歴史を垣間見ることができるとはどのようなことか、山田の論考からうかがい知ることができる。」(傍線稿者)

それ(稿者注・アイヌ地名)を通じて、昔の土地の先輩が、どんな生活を営んでいたのか、大きく云えば、土地の歴史とか昔の社会に触れていたのか、たとえば、登別の処でも、また室蘭の処でも、そこにハシナウシがあったことを書いて。記事に書いたように、狩猟神に捧げるハシナウ、つまり枝をつけたイナウ(木幣)を立てた場所である。(中略)そこに行けば、漁撈の民が海の幸を願って、海に祈りかけた心に触られることであろう。どこのコタンの人たちがその祭場を集つたらうか。登別の場合はヌブルベツの人たちであろう。室蘭の場合、アルトル(祝津)のコタンの人たちだったのであるまいか。あす(水族館の上)にハシナウスの地名があり、チャシ(稿者注・アイヌの岩)になつていた(河野常吉翁による)と云うことは、昔附近に然るべきコタンがあったことを教えてくれるのであった。」(注19)

このように山田は、「ハシナウス」という地名から「土地の歴史とか昔の社会に触れ」られることを述べている。「ハシナウス」という地名が、前述の①(アイヌ民族の生活地名)なのか、②(地図制作時の地形の説明)なのかはわからないが、地名から先住民の暮らしがうかがえるのは確かなことである。

では、「アイヌ民族特有の考え方を知ることができるとはどのようなことか。これも山田の論考を参考にする。「カムイコタン」は、石狩川(旭川)、空知川、雨竜川、夕張川、朝里(小樽)などに複数あるが、激流や激潭、または大崖がある地名である。山田は「アイヌ社会

では、動物も、山川草木も神であり、神の宿られる処であった。」地名の中では、地方地方の然るべき地形の処にだけ「神の居所」を意味する形ものが残っていた。」(注20)と述べている。その土地に「神」信仰を持つ者は、先住者か地図制作者かと言えば、当然前者と考えるのが自然である。土地に「カムイコタン(神の居所)」と名づける心は、和人ではなくアイヌの考え方の表れであろう。「カムイコタン」がたとえ先住民が日常使用しない②(地図制作時の地形の説明)だったとしても、それはアイヌ民族特有の考え方を反映したものであり、精神性の表れであり、ゆえに文化的一面と見てよいと考える。では最後に、筆者山田自身は「アイヌ語由来の北海道地名」を「文化」として見ていたのだろうか。主な山田論考から探してみた。(傍線稿者)

I 「アイヌ時代には文字がない。だが地名で残されたものは、昔の生活の一記録である。綴り合わせると古い、書かれざる歴史の一頁が浮かび上がってくる。貴重な無形文化財であったことを益々悟らされて来たのであった。」(注21)

II (稿者注・常呂町の地名調査を終えて)「こんなふうにして協力しあつて調査をしていった。町の郷土研究同好会のかたがたが町の援助をえて、この稿の印刷を待つまでもなく、貴重な町の文化を保存するため、このソーヤ、そのほかの主なアイヌ語地名の現場に標識柱を建てられた。」(注22)

地名を直接「文化」とは称していないが、それに近い例を挙げる。

III 「アイヌ語地名を調べて行つたら、霧の中のような北方古代史とか、文化の潮流のようなものに触れることができるかと思つて来たのであるが、但しそのアイヌ語をいい加減に読んだのでは何にもならない。」(稿者注・終わりに「平成四年晩春」の記載あり)(注23)

山田著述の分量に比べ、アイヌ語由来の地名に対して「文化」と称

することは多くない。が、特にⅢを見た時、山田は平成四(一九九二年)七月二十七日に死去しているので、亡くなる間際まで「アイヌ語地名」から「古代史」や「文化」に近づこうとしていたことがうかがえる。山田は「地名を「文化」であると積極的にそう呼んでいたわけではないかもしれないが、願わくはそうならんことを思い続けていたのではないのだろうか。

### あとがき・追記

数年に渡って指導資料をつくりました。教材研究や雑務に追われ例年の冬休みも二月で少しずつ進めていきました。山田秀三の文章に関する指導書でしたが、独善に陥らぬよう「であることとすること」の資料を範としました。そのためアイヌ語地名なのか「であること」なのか、読まれた方はわかりにくかったことでしょう。そういう欠点もありましたが、普段時折調べる程度の指導書について、作る側から見つめられて、また複数と比較できて非常に勉強になりました。今後に活かせることでしょう。

また、本稿の冒頭で「国家の言語としてアイヌ語も取り入れるべき」(注24)と述べたことに反対があったようです。確かに急に「公用語」としては難しいでしょうが、「少数民族言語」のような公的な位置づけがほしいところです。アイヌ語はアイヌ文化の代表です。公用語が日本語である日本国家の中で大きな摩擦がなく、少数民族言語アイヌ語に関係した地名が存在し、現在でも使用されていること自体が重要であり、そこに意義があり、ゆえに文化的価値があるのではないのでしょうか。自分の思想はあくまで保守派ですが、その点は改善される日が待たれます。

終わりにこの機会を勧めてくださいた北海道教育大学釧路校の佐野比呂己先生に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

注1 『アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集 月報4』(山田地名学の周辺)対談 山田秀三 川健二 草風館 昭和五十八(一九八三年)

注2 拙稿「山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化」(『国語論集16』北海道教育大学釧路校 国語科教育研究室 平成三十一(二〇一九)年 八五頁―一〇〇頁)

注3 拙稿「山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化(2)指導資料作成の試み」(『国語論集17』北海道教育大学釧路校 国語科教育研究室 令和二(二〇二〇)年三月 一五〇頁―一五八頁)

注4 拙稿「山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化(3)指導資料作成の試み」(『国語論集18』北海道教育大学釧路校 国語科教育研究室 令和三(二〇二一年)三月 二〇五頁―二二一頁)

注5 拙稿「山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化(4)指導資料作成の試み」(『国語論集19』北海道教育大学釧路校 国語科教育研究室 令和四(二〇二二年)三月 二一七頁―二四〇頁)

注6 拙稿「山田秀三「アイヌ語地名を歩く」の教材化(5)指導資料作成の試み」(『国語論集20』北海道教育大学釧路校 国語科教育研究室 令和五(二〇二三年)三月 一九一頁―二〇三頁)

注7 注2 八九頁―九〇頁

注8 注4 二一七頁―二二〇頁

注9 『アイヌ語地名リスト』本リストを利用するために「(北海道環境生活部 平成十三(二〇〇一年)

注10 『高等学校教育指導資料 アイヌ民族に関する指導の手引き』「アイヌ語の地名」の項(北海道教育庁生涯学習部学校教育課 平成四(一九九二年) 四〇頁)

注11 柳田は著「地名と地理」で「アイヌの地名解は永田方正氏の一著があり、又バチエラ師辞書の舊版の附録にも若干の講説があつて、今日では先づ十の八九迄大よそは意味が明らかになつ

たとつてよい」(『定本柳田國男全集 第二十卷』地名と地理」柳田國男 筑摩書房 昭和45(1970)年 三二頁 初出は『地理学評論』八巻 昭和7(1932)年)と述べている。しかし、実際にはアイヌ語由来地名には意味不明なものもつと多い。ちなみに、当時柳田は内地全般に至る地名の語源をアイヌ語で解く風潮に疑問を抱いていた。

注12 柳田國男『定本柳田國男全集 第二十卷』地名の話」(筑摩書房 昭和45(1970)年 七頁 初出は『地学雑誌』大正元(1912)年)

注13 注12一三一―一四頁

注14 山田秀三『北海道の地名』大黒島の項(北海道新聞社 昭和五十九(一九八九)年 二九九頁)

注15 児島恭子『アイヌ語地名の始まり』(『地名と風土』平成二十七(二〇一五)年 日本地名研究所 一〇九頁―一一〇頁)

注16 注15 一一〇頁

注17 注15 一一〇頁

注18 日本大辞典刊行会編集『日本国語大辞典 第17巻』「文化」の項③(昭和五十(一九七五)年 小学館 五五三頁)

注19 山田秀三『アイヌ語地名の研究3』(『登別・室蘭のアイヌ語地名を尋ねて』(草風館 昭和五十八(一九八三)年 三六四頁)

初出は『登別・室蘭のアイヌ語地名を尋ねて』(噴火湾社 昭和五十四(一九七九)年)

注20 山田秀三『アイヌ語地名の輪郭』(『アイヌ時代の神々の居処 地名調査メモの中より』(草風館 平成七(一九九五)年 一九

八頁 初出は『歴史公論』(『アイヌ時代の神々の居所』 昭和五十九(一九八四)年)

注21 山田秀三『アイヌ語地名の研究1』(『アイヌ語の地名を大切にしたい』二四九頁 (昭和五十七(一九八二)年 草風館 初出

は『アイヌ文化』第一号 (財)アイヌ無形文化伝承保存会 昭和五十一(一九七六)年)

注22 山田秀三『アイヌ語地名の輪郭』(『オホーツク海沿岸の小さな町の記録』一三二頁 (平成七年 草風館 初出は『常呂町百年史』常呂町百年史編集委員会編 昭和六十四(一九八九)年)

注23 山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』(『前文』一頁 (草風館 平成五(一九九三)年 「前文」末に「平成四年晩春」とある)

注24 注2 八五頁

(たにぐちまもる／北海道月形高等学校)